

# 鱗形屋

柏崎 順子

鱗形屋は明暦頃に江戸で出版を開始した本格的な江戸資本の書肆のひとつである。初代は加兵衛と称し、二代目は三左衛門、三代目は孫兵衛と称している<sup>(1)</sup>。出版を開始した当初は江戸吉原に取材した遊女評判記の類を出版し、続いていわゆる江戸版といわれる独特の造本様式の本を出版した書肆としても知られている。その後師宣風の挿絵の入った師宣絵本を手がけ、古浄瑠璃の正本も数多く出版し、赤本や黄表紙などにも手を染めるなど、常に江戸草子類の出版をリードしていた書肆といえる。にもかかわらず、鱗形屋という書肆はその全体像についてこれまで詳細な検討が行われたことがなかった。それはひとつには鱗形屋が江戸初期の創業から江戸中期にかけての長期にわたり江戸で展開した数々のジャンルの本を出版した書肆であったため、そのジャンルを横断しての鱗形屋像が検討されにくい状況にあったことが要因としてあろう。しかし鱗形屋が江戸草紙類の発展の一翼を担っている書肆であることを考えれば、江戸初期出版史において鱗形屋の営業の動向の考察はきわめて重要であるといえる。

筆者はこれまで先述したいわゆる江戸版と呼ばれる独特の造本様式をもつ本の考察を続けているが、この江戸版に関わる鱗形屋の動向としては以下のようなことが判明している。いわゆる江戸版は、万治・寛文期を中心に江戸資本の書肆、松会・本問屋・山本九左衛門・鱗形屋といった書肆が、京版を元版として独特の造本様式に作り替えた本である。具体的には料紙の質・行数の増加・独特の字風・師宣風の挿絵への改変・題簽のデザインの様式化等に関して作り替えるということが京版を江戸版に仕立て直すときの法則になっている。ところが鱗形屋は、造本様式においては他の三書肆と同質の江戸版を作成しているが、何点かの京版を元版とする江戸版以外は京版に元版を見出せないもの、即ち鱗形屋が開板したと考えられる例や、江戸の吉原等に題材をとった独自のテキストを開発するなど、他の江戸版を出版する三書肆とは異なる行き方をする書肆なのである。さらに、松会のグループの場合は元版とする京版のテキストを共有している例も少なくないのだが、一方でこの三

書肆が出版する江戸版をわずかの往来物等をのぞいては鱗形屋が出版することはない。つまりテキストについては松会・本問屋・山本九左衛門のグループと鱗形屋で棲み分けがおこなわれていると考えられるのである。

以上の事実からはまた、従来江戸版に関しては元版である京版を勝手に流用して作成されたとするのが通説であったが、江戸初期出版界において、京都の書肆から江戸の書肆へ少なくとも一部の書肆の間ではテキストを提供するような関係が存在していたということが判明するのである。ということは、松会のグループに較べれば本数は少ないとはいえ、やはり江戸版を出版する鱗形屋も京都の書肆との何らかの繋がりが存したと考えるのが穏当であろう。以上のようなことをふまえれば、鱗形屋の考察にあたっては、松会のグループの動向と随時つきあわせてみることで、鱗形屋の江戸出版界における位置付けが浮き彫りになると考えられる。

前稿までの考察で、江戸版作成の中心的役割を担っていたと考えられる書肆松会の動向調査から、松会の出版する本はその造本様式から四期に整理することができると考えている。第一期は明暦以前で、この時期は京版の求板や被せ彫りを専らとしている。第二期は万治・寛文期で、前述のような京版を元版にして一定の様式に仕立て直した江戸版を盛んに出版する時期である。第三期は延宝・天和期で、前期の江戸版の作成は激減し、明暦以前のように京版を覆刻したり求板したりするようになる他に、師宣絵本や『江戸鑑』の出版など、当地江戸でのテキストの開発が行われるようになる。京版を元版としての江戸版を作成するシステムが崩壊した時期と推測される。第四期の貞享以降は管見では江戸版の作成は全く行われなくなり、かわりに上方板との相合板が増加する。上方の書肆との関係の在り方が、江戸版が作成されていた万治・寛文期とは何らかの事情で変容した時期と考えられよう。松会のグループである山本九左衛門・本問屋は松会の営業の第二期、即ち万治・寛文期から登場し、以後は松会と同様の動向をみせている。

本稿での鱗形屋の考察においては、それが江戸初期の江戸の出版界における動向の一環であるという観点から、江戸版を出版するという点において接点を有する三書肆、松会・本問屋・山本九左衛門の上記のような営業の動向と照合しながら考察を進めることにする。したがって今回、鱗形屋について考察の対象とする時期は、江戸版が激減する貞享元年以前、即ち天和期までとする。

## 万治期

現時点で確認できる鱗形屋の出版の嚆矢は、管見では万治三年『吉原かがみ』

(複製一都立中央図書館東京誌料所蔵)である。東京誌料本は本文複製の後に「高尾年代記ニ拠ル」として「万治三年九月吉日／うろこかたや／新板」と摺刷されている。これは、柳亭種彦の『高尾年代記』(天保十二年凡例、嘉永二年跋一国立国会図書館所蔵)からの引用によるものだが、これを信用すれば鱗形屋は少なくとも万治三年には出版を開始しているということになる<sup>(2)</sup>。万治年間には他に無年記で『高屏風くだ物語』(推定万治三年刊一天理大学天理図書館所蔵)・『吉原枕』(推定万治三年刊、未見一渋井清旧蔵)・『吉原用文章』(推定万治四年頃刊——東北大学附属図書館狩野文庫所蔵)等が鱗形屋から出版されている<sup>(3)</sup>。すべて吉原の遊女の評判記で、鱗形屋が江戸に題材をとって独自にテキストを開発しての出版である。遊女評判記に関しては、江戸では最初に遊女評判記を出版したと考えられること、またその点数の多さからいっても鱗形屋が江戸における遊女評判記というジャンルを定着させたといっても過言ではない。

これら遊女評判記は一定の造本様式を有している。その造本様式を万治・寛文期に作成された松会のグループの江戸版と比較してみる。ただし既述の如くこの期の鱗形屋版は現存するものはなほだ少なく、原本が存する本も閲覧がかなわないため、主に複製本あるいは影印での比較であることをお断りしておく。判型は『高屏風くだ物がたり』・『吉原用文章』が中本、『吉原かがみ』が半紙本で、典型的な江戸版が大本であることとは異なる。行数は十二行から十四行程度で江戸版より少ない。字風は江戸版に近い風であるが、行間のあき方等も含め江戸版の典型とまではいかない字風である。挿絵は江戸版の挿絵に匹敵する師宣ないしは師宣風の挿絵。料紙と題簽に関しては複製本あるいは影印での比較のため確認できない。したがって遊女評判記の造本様式は、字風や挿絵など江戸版の造本様式と類似した要素もあるが完全には一致せず、いわば江戸版の変種のような様式といえよう。

以上の事実から、この期の鱗形屋の出版の特徴をまとめてみると、鱗形屋は松会が典型的な江戸版を作成し始めていた万治年間には同様の江戸版は作成せず、江戸で独自にテキストの開発をした遊女評判記を、江戸版の特色を一部備えた特有の様式で出版している時期といえる。

ちなみに主に寛文期になるが、造本様式が上記の鱗形屋版と同様の遊女評判記を出版する書肆が登場する。板木や又右衛門・升屋・正本屋である。寛文六年板木や又右衛門版『吉原大全新鑑』、寛文六年ますや版『吉原雀』、寛文八年正本屋版『よし原六方』、寛文十二年板木や又右衛門版『吉原丸裸』等である。これら三書肆はいずれも万治・寛文期に古浄瑠璃を主に出版している書肆である。鱗形屋もこれらの

書肆よりやや遅れて元禄期頃から古浄瑠璃の出版に着手している。つまり万治・寛文期、松会のグループが京版を元版とする江戸版を出版するのに対し、同時期に鱗形屋を筆頭とした板木屋又右衛門や升屋・正本屋のグループは、典型的な江戸版とはやや異なるが挿絵等共通する要素も有する特有の造本様式で遊女評判記を出版しているということなのである。この鱗形屋のグループは遊女評判記以外に古浄瑠璃を出版するという点でも共通の属性を有している。様式の観点からいっても古浄瑠璃の判型が中本や半紙本であることと遊女評判記の判型は同様で、さらに版心の様式も、魚尾がなく大黒口が上下と中央に存するような様式が江戸版の古浄瑠璃にみられるが(『かつらき』(仮題—大阪大学附属図書館赤木文庫所蔵)・『聖徳太子御伝記』(大阪大学附属図書館赤木文庫所蔵)等)、この様式も遊女評判記『吉原鑑』(都立中央図書館東京誌料所蔵)・『高屏風くだ物かたり』(天理大学天理図書館所蔵)・『讃嘲記時之大鞞』(天理大学天理図書館所蔵)・『吉原こまさらい』(都立中央図書館東京誌料所蔵)(以上すべて鱗形屋版)等に散見される。このように遊女評判記と古浄瑠璃はいくつかの特定の書肆がそのジャンルの本を出版すること、その様式に共通性が見出せること等から、出版史の観点からいえば同じ流れのなかに位置づけられる書物と考えてよい。

以上のような万治年間の鱗形屋の出版の様相を、江戸版を作成した別のグループである松会・本問屋・山本九左衛門の出版の動向と照合してみると以下のようなことが判明した。まず鱗形屋は万治年間のなかでも明暦三年『若衆物語』と寛文初年(万治四年)『吉原用文章』を除けば出版年時推定本も含め四本すべてが万治三年の出版である。一方、松会のグループはといえば、この時期山本九左衛門・本問屋ははまだ出版を開始していない。松会は万治元年・二年に出版が集中している。万治三年には『一本菊』の松会版の存在を『絵本年表』が伝えているが未見である。つまり松会が出版点数の多い年は鱗形屋の出版点数は少なく、鱗形屋が多く出版を行う年は松会の出版点数は明らかに少ないのである。かつて江戸版について考察した際、松会のグループと鱗形屋は江戸版様式の版本を作成する職人達、少なくとも料紙の調達ルートや版下書き・板木下絵師など江戸版の特徴を決定付ける作業を担う職人については独自に抱えているのではないかと推察したことがある<sup>(4)</sup>、右のようなお互いの出版年時の棲み分けの事実を考えれば、その可能性は高いといえよう。

ちなみに板木屋又右衛門は、亀屋又右衛門のことである。承応から延宝年間にかけて古浄瑠璃を多数出版している書肆である。所付けが存する又右衛門板遊女評判

記はないが、古浄瑠璃『にしきど合戦』（大阪大学附属図書館赤木文庫所蔵）の刊記に「承応四年／初春吉旦／作者 岡清兵衛重俊／御成町／はんぎや 又右衛門」と、また同じく古浄瑠璃『北国落』（仮題—東京大学総合図書館霞亭文庫所蔵）の刊記に「万治三歳六月吉日 御成町／又右衛門板」とあるところから、少なくとも承応四年（明暦元年）から万治三年の間の住所は御成町であることが判明する。

また升屋は、管見では万治三年刊古浄瑠璃『箱根山合戦』（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）が最も早い出版で住所は通油町である。古浄瑠璃では他に寛文九年『山名神南合戦』（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）等があるが、升屋は他に寛文二年刊役者評判記『剥野老』（版本写—国立国会図書館所蔵）や延宝九年刊遊女評判記『吉原三茶三福一対』（国立国会図書館所蔵）等を出版しており、古浄瑠璃と評判記を主に出版した書肆である。

正本屋は正本屋十右衛門のことであろう。（寛文十二年『比翼連枝之由来』（版本写）の奥付—山口大学附属図書館所蔵）正本屋十右衛門はまた、もづや十右衛門と表記されることもある（貞享三年『椀久浮世十界』（『元禄歌舞伎傑作集』による）。もづやといえは明暦年間に刊記に「もづや」とのみ摺刷する書肆が存する。『咸陽宮』（複製—『珍書大観金平本全集』）の刊記に「明暦三年／通油町／もづや」と摺刷されているそれである。この「もづや」は住所がもづや十右衛門と異なるため別の書肆である可能性もあるが、「もづや十右衛門」と「もづや」それぞれの出版本の刊記の住所が時間的に重複することはない。そのため明暦三年当時は通油町で営業していたもづや十右衛門が、寛文十二年頃には堺町に移転していた可能性もある。

以上のように、これら鱗形屋と同質の本を出版する書肆である板木屋又右衛門は御成町や日比谷周辺を何度か移転して営業しており、升屋・正本屋十右衛門等は日本橋周辺で営業している書肆のようで、地理的には必ずしも一箇所に集中しているわけではない。というのは後述するように、松会のグループは住所がごく近接しているのであり、これらの書肆が共同で江戸版の作成したことと住所が集中していることは何らかの因果関係が存すると考えられるのであるが、鱗形屋のグループの場合は必ずしも住所が近接しているわけではないことを確認しておきたい。鱗形屋の営業のコンセプトと何らかの関係があると推測する。

### 自寛文二年至寛文八年

寛文前期であるこの期の出版は、管見では寛文七年と八年に出版が集中している<sup>(5)</sup>。寛文七年は『わかくき物語』（川口元氏所蔵）・『やっこ俳諧』（稀書複製会複

製本一都立中央図書館東京誌料所蔵)・『御成敗式目』(東京家政学院大学図書館大江文庫所蔵)・『新板銘つくし』(東北大学附属図書館狩野文庫所蔵)・『あたごのほんち』(未見<sup>6)</sup>), 寛文八年は『吉原こまざらい』(推定, 複製一都立中央図書館雄東京誌料所蔵)・『吉原よぶこ鳥』(推定一天理大学天理図書館所蔵)・『讚嘲記時之太鞍』(推定, 複製一天理大学天理図書館所蔵)・『吉原根元記』(未見一『吉原書籍目録』等)が鱗形屋から出版されている。

この時期の特徴は、前期の万治年間遊女評判記のみの出版であったところから、遊女評判記以外の、京版を元版とするいわゆる江戸版が現れることである。上記の『御成敗式目』は往来物によくある尊円流の字であるが、『わかき物語』・『あたごのほんち』は本格的な江戸版様式の造本である。一方、『吉原よぶこ鳥』・『吉原こまざらい』・『やっこ俳諧』は半紙本で師宣の挿絵、版心が江戸古浄瑠璃系の特徴を持つことなど依然、遊女評判記の様式である。このうち『やっこ俳諧』は唯一題簽が複製本の表紙に存する。上部飾り枠のなかに「ゑ入」と角書きし、その下に「清十郎ついでん／やっこ俳諧」と、その下に鱗形屋の商標「▲」が摺刷されている。角書きのデザインは江戸版風であるが、外題の下に書肆の商標が入るのは古浄瑠璃の題簽の様式に通じるものである。このことは先述したように遊女評判記と古浄瑠璃が出版史の観点からは同じ流れのなかに位置するものであることのひとつの証左といえよう。以上、この寛文初頭から同八年までの時期は従来の遊女評判記と江戸版が混在するいわば過渡期の時期といってよい。

この時期の出版を松会のグループの出版と照合してみる。まず出版年時であるが、この寛文初期には松会に加えて山本九左衛門が寛文四年から、本問屋が寛文七年から出版を開始している。松会は寛文元年から二年は江戸版の出版は管見では『水鳥記』一本のみで、他は禅書と往来物が一本ずつである。寛文三年の出版は管見に入っていないが、寛文四年からは毎年四本から六・七本の江戸版を出している。山本九左衛門は寛文四年に七本、寛文六年に三本の江戸版を出版している。本問屋は寛文五年に一本、寛文七年に一本、寛文八年に三本の江戸版を出版している程度で、まだ出版点数が少ない時期である。以上を整理すると、寛文四年は山本九左衛門の出版点数が多く、寛文五年は松会、寛文六年は山本九左衛門、寛文七年は鱗形屋、寛文八年は本問屋と鱗形屋が江戸版を出版している。江戸版作成は山本九左衛門・本問屋も加わった四書肆の間で万治年間同様、出版年時の棲み分けが行われているようである。また寛文初年から同三年まではどの書肆も出版点数が少ないことも注目しておきたい。何らかの事情があるのであろう。

次にテキストの内容の問題である。先述したように松会のグループが江戸版を作成する際に用いる京版を元版とするテキストを鱗形屋が出版することはない。またこの期に出版された鱗形屋の江戸版は『あたごのほんち』と『わかくさ物語』であるが、『わかくさ物語』は先行する京版を見出すことができず、鱗形屋が開板した可能性の高い本である。これは次期の鱗形屋の江戸版にも見出せる傾向である。また、松会のグループの江戸版は今日言うところの仮名草子が元版となる傾向があるのに対し、鱗形屋版の『あたごのほんち』も『わかくさ物語』もどちらかといえば室町物語の範疇に入るような、より中世色の濃いテキストを出版している傾向が指摘できる。

### 自寛文九年至寛文十三年

この時期は寛文十三年『まんじゅのまへ』（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）のほかは、寛文十年と十一年に出版が集中している。寛文十年『清滝物語』（静嘉堂文庫所蔵）・『観音経和談抄』（東京大学総合図書館所蔵）、同十一年『続伽婢子』（個人蔵）・『私可多咄』（国立国会図書館所蔵）・『日蓮上人註画讃』（東京大学総合図書館所蔵）・『堪忍記』（広島大学中央図書館所蔵）・『しぐれの宴』（国立国会図書館所蔵）等がある。このうち『まんじゅのまへ』・『清滝物語』以外の七本はすべて京版に元版を見出すことができる。この期に寛文八年までは存していた遊女評判記の出版は管見では確認できなかった。松会のグループが万治・寛文期そうであったように、鱗形屋が主に京版のテキストを元版として江戸版を作成していた時期といえる。

この期の出版を松会のグループの出版と照合してみる。まず出版年時であるが、前述のように鱗形屋の出版は寛文十年と十一年に集中しており、寛文九年の出版は管見では見出せなかった。一方松会は四本、山本九左衛門は三本、本問屋は三本の江戸版を出版しており、寛文九年は松会のグループが江戸版を作成した年のようである。寛文十年は鱗形屋板は二本であるが、松会は五本、本問屋は八本、山本九左衛門は三本の出版である。寛文十年は主に松会と本問屋が江戸版の作成を行った年のようである。寛文十一年は鱗形屋が六本、松会が六本、山本九左衛門は二本、本問屋は管見では江戸版の出版を見出し得なかった。寛文十一年は松会と鱗形屋が主に江戸版を作成した年のようである。寛文十二年は、鱗形屋は管見では出版を見出せなかった。同年松会は三本、山本九左衛門は一本、本問屋は管見では寛文十二年の出版は見出せなかった。全体に江戸版の作成が少ない年といえよう。寛文十三年

は鱗形屋は一本、松会は五本、山本九左衛門は一本、本問屋は寛文十三年の出版を見出せなかった。寛文十三年は松会が主に江戸版の出版を行った年のようである。以上、やはり前期と同様に出版年時の棲み分けが行われていることが指摘できるのである。

テキストの内容に関しては、鱗形屋版はこの期も元版の存在しない、つまり鱗形屋が開板したと考えられる例が存する。『清滝物語』・『まんじゅのまへ』である。また京版が元版である鱗形屋の江戸版の作成に関しては、松会のグループが出版した江戸版の元版と重複する例は往来物以外はない。また松会のグループが作成する江戸版はいくつかの特定の京都の書肆が元版である傾向が見出せたが<sup>(4)</sup>、鱗形屋の場合はそうした傾向は看取できなかった。

### 延宝期

延宝期は、延宝元年から同三年までは管見では鱗形屋の出版は確認できない。延宝四年の出版は管見では一本のみで、『義経記』（長崎大学附属図書館所蔵）が本問屋と相合で出版されている。延宝五年は『平治物語』（都立中央図書館加賀文庫所蔵）・『糺物語』（京都大学文学部図書館頼原文庫所蔵）、延宝六年は『義氏軍記』（天理大学附属天理図書館所蔵）・『百人一首像讃抄』（国文学研究資料館所蔵）・『鎌倉管領九代記』（岡山大学附属図書館池田文庫所蔵）・『恋の息うつし』（未見—『艶本研究 師宣』による）、延宝七年は『歌林良材集』（静嘉堂文庫所蔵）、延宝八年には『大和絵つくし』（東北大学附属図書館所蔵）、延宝九年は『源氏抄』（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）が出版されている。

この期の特徴は、いわゆる師宣絵本と称される『恋の息うつし』や『大和絵つくし』が登場すること、『義経記』・『平治物語』・『義氏軍記』・『鎌倉管領九代記』と軍記物が多いことが挙げられる。また注目すべきは延宝四年『義経記』が本問屋と相版であること、延宝六年『百人一首像讃抄』が未見ではあるが元禄五年松会版が存在する可能性（『雲泉山荘誌別冊第四 家蔵松会板之書目』所載）があること、延宝六年鱗形屋版『恋の息うつし』を松会三四郎が貞享二年に求板して出版すること（鱗形屋板も松会版も未見—『艶本研究 師宣』による）である。これらのことは先に江戸版を出版する書肆の関係性として松会のグループと鱗形屋は出版するテキストについて棲み分けが行われていると述べたことに矛盾するかの如くである。しかし先述した棲み分けの法則は万治・寛文期に限定しての法則である。前稿の松会版の考察の際に指摘したように<sup>(7)</sup>、松会は延宝期になるとそれまで行っていた京



版を元版とした江戸版の作成をほとんど行わなくなり、代わりに江戸版作成以前と同様に京版の覆刻や求板をするようになる。山本九左衛門も延宝期は専ら浄瑠璃の正本と京版の求板である往来物を、本問屋も師宣絵本の出版と数点の京版の求板をしており、松会のグループすべてが新たなテキスト獲得の方法やジャンルの模索をしている。一方、鱗形屋もまた寛文十年・十一年頃は万治・寛文期の松会のグループと同様に京版を元版とする、主に仮名草子を江戸版に仕立て直していたのであるが、この延宝期は軍記物を出版したり、師宣絵本の出版を開始したり『歌林良材集』のような元版が京版である物の本を求板してみたりと、松会のグループと同様に出版するテキストに変化が生じている。この時期何らかの理由で京版を提供してもらい、江戸版を作成する関係が崩壊したと考えられるのである。同時に松会のグループと鱗形屋がテキストの棲み分けをしていた関係も崩れた結果、上記のような現象が生じているのであろう。

このように延宝期は松会のグループも鱗形屋も同様の動きをみせていることから、江戸のこれらの書肆と上方の書肆との関係に何らかの変化が生じた時期と考えてよいと思う。このことはまた延宝期に江戸では仮名草子の出版が目に見えて減少したということの意味している。もちろん下り本も江戸に流布したではあろうが、江戸における仮名草子の享受の問題として注意しておくべきであろう。

## 天和期

天和期は、天和二年には『清水物語』（日本大学附属図書館所蔵）・『浮世続絵尽』（東洋文庫所蔵）・『小袖のすがたみ』（未見—プルヴェラー・コレクション所蔵）・『岩木絵つくし』（未見—大英博物館所蔵）が、天和三年には『若草物語』（京都大学文学部図書館所蔵）・『下り竹斎』（たばこと塩の博物館所蔵）・『源三位頼政家集』（雲英末雄氏所蔵）・『藤川百首』（都立中央図書館加賀文庫所蔵）・『三世相小鑑』（都立中央図書館加賀文庫所蔵）・『増補千字文』（雲英末雄氏所蔵）・『武者絵づくし』（未見—ボストン美術館所蔵）・『美人絵づくし』（天理大学天理図書館所蔵）・『花鳥絵づくし』（京都大学附属図書館所蔵）・『岩木絵づくし』（東北大学附属図書館所蔵）・天和四年に『しぐれのえん』（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）・『料理献立集』（未見—古書目録）・『当風品絵づくし』（未見—個人蔵、千葉市美術館『菱川師宣展』図録による）・『団扇絵づくし』（未見—大英博物館所蔵）・『当世早流雛形』（国立国会図書館所蔵）が出版されている<sup>(8)</sup>。

天和期は二つの特徴がみられる。ひとつは師宣絵本が完全に鱗形屋の出版の主流

になることと、今ひとつは以前に松会が出版した本を、この時期鱗形屋が出版する例が複数見られることである。まず師宣絵本であるが、なかでも「～絵づくし」という書名の本が多く見受けられるようになる。天和二年に『岩木絵つくし』を、天和三年に『美人絵づくし』・『武者絵づくし』・『花鳥絵づくし』を、天和四年に『大和侍農絵づくし』・『当風品絵づくし』・『団扇絵づくし』を出版している。また、松会版と同一の本の出版は天和三年の『源三位頼政家集』（松会版は天和三年版一未見。『雲泉山莊誌別冊第四 家蔵松会板之書目』による）、天和四年『藤川百首』（松会版は寛文七年版一未見。『雲泉山莊誌別冊第四 家蔵松会板之書目』による）、天和四年『料理献立集』（松会版は寛文十二年版）等である。延宝期に京版を元版として江戸版を作成する江戸と京都の本屋の関係性が崩壊したことに伴い、松会のグループと鱗形屋のテキストの棲み分けの法則が崩壊した結果の現象と説明できよう。

いまひとつ特筆すべきは、以前に鱗形屋が出版した本の再刻本が天和三年と四年に複数出版されていることである。天和三年に寛文十年版『観音経和談抄』・寛文十一年版『日蓮上人註画讃』・延宝六年版『百人一首像讃抄』・寛文七年版『わかき物語』・天和二年『岩木絵つくし』を、天和四年に寛文十一年版『しぐれの宴』を再刻している。これは天和二年十二月二十八日に江戸に大火があって、鱗形屋が所有していた板木が残らず焼失したと推測されており<sup>9)</sup>、その際焼失した何点かの自版を再刻したものと考えられるのである。

他には天和二年刊『清水物語』、天和三年『下り竹斎』等の仮名草子が出版されている。

この時期の出版を松会のグループの出版と照合してみる。まず出版年時であるが、天和三年と天和四年に出版が集中している。前述のように天和二年十二月の火災で板木を焼失したことが要因となってそれを補うべく直後に出版が集中しているであろう。天和三年は十二本、天和四年は七本と特に火災直後は例年に較べ群を抜いて出版点数が多い。一方、松会のグループは松会は十一本、山本九左衛門は一本、本問屋は天和年間の出版を確認できなかった。山本九左衛門の住所は鱗形屋と同じ大伝馬三丁目で山本も確実に火災の被害を被ったと考えられ、また本問屋は通油町、松会は当時の住所は不明だが元禄九年の『武鑑』に御書物師として掲載される時点では長谷川町であり、いずれも日本橋界限である。よって火災の被害は皆一様に被っていると推測される。この事態にあたって、鱗形屋は精力的に再刻や開板を行うが、松会のグループは、松会以外はしばらく出版が困難な状態になったようである。この事実は別の見方をすれば、松会のグループの山本九左衛門や本問屋は、本来各

自で独立して営業するには資本的に厳しい経営規模であり、万治・寛文期の京都の書肆との関係を構築しての江戸版の作成は、そうした資本力の問題のために松会が構築したシステムに便乗した結果であるとも考えられよう。

## まとめ

以上、鱗形屋初期の出版についてその傾向から五期に分類し、他の江戸版を出版する松会のグループの動向と照合しながら考察してみた。

鱗形屋は出版を開始した当初、即ち万治期には主に吉原に取材した遊女評判記を出版し、また当時の江戸の奴ことばを用いての俳書も出版するなど、江戸の風俗を題材にした、京都に頼らない独自のテキストの開発につとめている。ちなみに奴ことばを用いた俳書『やっこ俳諧』は、奥書に「滄浪のわれなれば、くさり竹の窓の前一畳敷の床のほとりにゆかり、発句をたたみ、三み川の月を案ずる所に可徳公より妻蔵ヲ仕丁として一卷を持ち来る」というくだりがあり、可徳公なるものから仕丁がやっこ俳諧の本文を届けにきたことが記されていて、この判者が旗本のような身分の人間ではないかと推定されるのである。また、遊女評判記『高屏風くだものがたり』の著者は元吉原と新吉原の仮託の双方の様子を伝え、さらに二度上方に上った際に京の島原と大坂の新町へ行き、両地の評判も記している。つまり一介の庶民の著述とは考えにくく、いずれの例も鱗形屋にテキストを提供していたのは、大名クラスの間人か分限者等の上層の間人であった可能性が指摘できるかと思う。これは松会が元禄期になって御書物師に取り立てられることと同様に、江戸初期登場してくる江戸資本の書肆は特別な人脈があってはじめて安定した営業ができる状況を示唆しているように思われる。その後、寛文期前半までは遊女評判記の出版が続く。この時期注目したいのは、鱗形屋と同様の出版物、遊女評判記と古浄瑠璃を出版する書肆が他に存在することである。升屋・板木屋又右衛門・正本屋等である。ただしこれらの書肆は松会のグループのように鱗形屋とテキストを共有するような関係にはなく、それぞれ独自のテキストで出版を行っている。また古浄瑠璃に関しては万治・寛文期は鱗形屋以外の本屋が出版し、鱗形屋版古浄瑠璃は貞享以後に出版されるという時間的なずれがある。しかし、これらの書肆が出版する本は遊女評判記にせよ古浄瑠璃にせよ造本様式としては一貫したスタイルを有している。さらに遊女評判記と古浄瑠璃が造本様式として多くの共通点を有する同じ系統の本と位置づけられるところから、鱗形屋と升屋・板木屋又右衛門・正本屋は何らかの関係を有している可能性がある。また鱗形屋はおそらく寛文前半期までに京版の求板も行

っている。万治三年度々市兵衛版『源氏鬢鏡』と寛文二年平田長左衛門版『豎亥録  
 仮名抄』を求板しているが、求板元は異なっており、松会のグループのように特定  
 の書肆との繋がりはない。寛文七年にはいわゆる江戸版を一本出版しているが、本  
 格的には寛文十年・十一年に集中して七本の江戸版を出版している。この際の元版  
 となる京版は松会のグループが江戸版を出版する際の元版とは異なる書肆のもので、  
 特定の書肆が元版であるという傾向もない。また造本様式としては江戸版であるが、  
 元版のない、鱗形屋が開板したと考えられる例が存することも注目される。『わか  
 くさ物語』・『清滝物語』・『まんじゅのまへ』である。またこれら鱗形屋版は、松会  
 のグループの江戸版の元版が主に仮名草子の類であるのに対し、室町物語と称され  
 るような、より中世色の濃いテキストが用いられており、江戸版作成の際の松会の  
 グループと鱗形屋のテキストの選択におけるコンセプトの相違といったものが看取  
 される。江戸版様式の本を作成する際、鱗形屋はテキストの獲得の仕方について松  
 会のグループとは別の方法を模索したということかと思う。延宝年間になるとテキ  
 ストの内容は多様になる。軍記物や物の本、さらに師宣絵本と称される絵本が登場  
 してくる時期である。松会のグループが江戸版を作成しなくなり、江戸でのテキ  
 ストの開拓や京版の求板や師宣絵本の出版を始めた時期でもあり、鱗形屋も松会のグ  
 ループと同じ動向をみせているのである。天和年間になると鱗形屋の出版は完全に  
 師宣絵本の出版が主流になる。また特筆すべきは松会が以前に出版したテキストを  
 鱗形屋が少なくとも三本は出版していることである。松会のグループと異なる営業  
 の路線をとっていた鱗形屋が万治・寛文期に松会のグループが築いていた京都の書  
 肆との関係が崩壊したことで、江戸版という造本様式以外は接点のなかった関係性  
 が変容した結果といえるだろう。

鱗形屋は松会のグループとは異なる行き方をする書肆であると冒頭で述べたが、  
 具体的には松会等と同じテキストを用いないということの他に、今回江戸版を出版  
 する年時においても棲み分けが行われている傾向があることが判明した。これは考  
 えてみれば江戸版が独特の字風を有すること等から、ある特定の職人によって作成  
 されていたと考えれば当然といえば当然のことではある。よって鱗形屋と、松会の  
 グループのなかでは先駆けて江戸版を開始した松会は、テキストを開拓しようとす  
 る方針や元版となる京版の内容の傾向等は異なるのだが、江戸版を作成する職人達  
 については出版を開始した当初から共有していた可能性が高い。松会は万治期当初  
 から江戸版を作成するシステムを構築していたところに寛文四・五年ごろから山本  
 九左衛門と本間屋が加わり、さらに鱗形屋も寛文十年、十一年頃は一時、松会のグ

グループとは関係をもつ元版の書肆が異なっているが、京版を元版とした江戸版を作成するシステムで出版している。

また松会のグループと鱗形屋が明確に異なる営業のコンセプトを有していたのは万治・寛文期のことであり、延宝以後は京版を江戸版に仕立て直すシステムが崩壊したことにより、鱗形屋と松会のグループと一緒に相版を出版したり、鱗形屋がかつて松会が出版した本のテキストを出版するといった現象が生じている。つまり貞享以前の江戸の出版界は、松会のグループや鱗形屋のグループのように、いくつかの書肆が協力して出版事業を切り開く時期が存し、その後情勢の変化によってグループの再編が行われたりしながら江戸の地本出版の地盤を築いていったということなのである。そしてそれを担った書肆は日本橋界限や日比谷周辺に住居を構えていた者たちである。また本稿の鱗形屋の考察を通して、これまで松会のグループの問題として考察してきた江戸版作成のシステムの崩壊は松会のグループのみの問題として理解するべきではなく、初期出版界全体の問題として考えるべきレベルのことであることが見えてきた。今後の課題としては、以上のような結果をふまえ、これら江戸の書肆が特定の場所で営業している背景に注目して考察することが重要であると考えている。また江戸版の特徴である師宣風の挿絵が、実は江戸で出版される本のみ限定して使用されているわけではなく、京版の仮名草子にも散見されること、さらに古浄瑠璃というジャンルにおいては、いずれも師宣風の挿絵が使用される点において京版と江戸版の差別化ができないという事実をどのように考えるかという重要な問題が残っている。江戸で旺盛な師宣風の挿絵入りの古浄瑠璃出版をした書肆であること、師宣の絵を絵本というかたちで主力商品にしたこと等、さまざまな意味で師宣および師宣工房と関わりの深いと考えられる鱗形屋の考察はまだまだ充分ではない。ひきつづき検討課題としたい。

## 注

1. 鱗形屋加兵衛板は管見では二本を確認している。ひとつは再刻本『讃嘲記時之太靴』（天理大学天理図書館所蔵）で、跋文の後に「うろこかたや加兵衛開板（鱗一印記）」と摺刷されている。天理大学天理叢刊『遊女評判記』の解題によれば、天理本『讃嘲記時之太靴』は推定寛文四・五年頃出版の『讃嘲記時之太靴』の増補版で寛文七年頃の出版と推定されている。もう一本は『吉原よぶこ鳥』（天理大学天理図書館所蔵）で、該本は刊記を含む後半が欠損しているが、柳亭種彦編『吉原書籍目録』に、「巻尾に阜月中旬うろこ形屋加兵衛開板／巻中に寛文申のとしとあり是寛文八年なり」と記されていることによって『吉原よぶこ鳥』も鱗形屋加兵衛版であると推測される。つまり『よぶこ鳥』も含めての

現時点で確認できる鱗形屋加兵衛版は二本とも遊女評判記ということになる。この二本の加兵衛版には所付けが存しないので、住所が寛文期になって鱗形屋版の刊記に現れる大伝馬三丁目であるという確証はない。ということは寛文期に住所を大伝馬三丁目と表記する通称の無い「うろこかたや」とは異なる書肆の可能性もある。しかし、加兵衛が出版した遊女評判記と体裁が全く同一で、なおかつ「うろこがたや」と表記する遊女評判記が複数存在し、しかもその中には住所を「大伝馬三丁目」と記す本（『吉原こまざらい』複製一都立中央図書館東京誌料所蔵）が存在する。つまり大伝馬三丁目で営業していた「うろこがたや」が出版した遊女評判記も存在するのである。ということは住所と遊女評判記という内容と、通称の有無という鱗形屋の表記の相違の三要素から「うろこかたや」と「うろこかたや加兵衛」が異なる書肆であるか否かを確定することはできないということである。したがってなお「うろこかたや加兵衛」と「うろこがたや」が異なる書肆である可能性は残しているが、本稿ではひとまず同一の本屋として扱うことにした。

2. 万治三年鱗形屋版『吉原鬢鏡』という本が存在するが、これは万治三年度々市兵衛版『吉原鬢鏡』の求板本で、書肆の部分だけ入木修正した本である。したがって鱗形屋版の年記万治三年は度々市兵衛の出版年時であって鱗形屋の出版年時とは限らない。鱗形屋版は出版年不明本として扱わざるを得ない。
3. 本稿でとりあげた鱗形屋版遊女評判記で刊年が推定になっているものは、天理大学天理叢刊『遊女評判記集』の解題での推定をそのまま採用したものである。推定の根拠は本文や序文中に刊年の明らかな既刊本の書名が出てきたり、他本の増補改訂板であるという記述などによるものである。かりに実際の刊年が多少動いても、本稿で試みた出版物の内容による時期的分類に変更を迫るものではないので、そのまま利用した。
4. 柏崎順子「江戸版考 其三」（『人文・自然研究』第四号、2010年、一橋大学大学教育研究開発センター）
5. 寛文二年鱗形屋版『堅亥録仮名抄』（早稲田大学図書館小倉文庫所蔵）という本が存するが、これは寛文二年平田平左衛門の求板である。鱗形屋版は平田版の年記の部分も含めて入木修正し、あらたに「寛文二年」と彫刻しているが、初版の刊年をそのまま彫刻した可能性もあり、鱗形屋版が寛文二年の刊行か否かは判然としない。
6. 川口元氏所蔵『あたごのほんち』は大本三冊。替題簽に「愛宕之本地」と墨書。内題は上・中・下とも削除してあり、各巻初丁一行目は下方にそれぞれ「上（中・下）」とのみ摺刷されている。柱題は「上あ（中・下）」で、本文の内容からも「あたごの本地」に相違ない。典型的な江戸版様式の本で刊記は最終丁オモテの左端一行に「江戸大伝馬町三丁目うろこかたや板」と摺刷され、本文最終行と刊記の間三行分が削除された痕跡を残しているが、この部分に寛文七年の年記が存したと推測される。したがって寛文七年版の改修本と推測されるが、料紙の質からいって初印本からそう遠くない時期、寛文後期あたりまでの出版であろう。
7. 柏崎順子「松会三四郎 其二」（『言語文化』第45巻、2008年、一橋大学語学研究室）
8. 鱗形屋板師宣絵本はこの他無年記で『大和のおほよせ』（未見一ポストン美術館所蔵）・『恋のみなかみ』（千葉市美術館所蔵）・『鹿野武左衛門口伝はなし』（千葉市美術館所蔵）がある。いずれも天和期頃の出版と推測する。
9. 佐藤悟「『月次のあそび』初版本の発見と報告」（『書誌学月報』第二十五号、昭和六十一年、青裳堂書店）